

Political

「俺が覚だ」

ポスト〈68年〉の理論的悲哀

一九六九―一九七九

一九「七九」年一月一九日、東京大学安田講堂前。六九年のまちがいではない。一九日はたぶんまちがいではない。記憶にしたがって書いていたのでそう言うほかない。何百人かをまえに私はアジ演説をした。安田磐が陥落してちょうど一〇年後のその日その場で集会があったことは、当日の参加者を少し超えるぐらいの範囲の人々にかろうじて記憶されているだけであろう。呼びかけ団体の一つの代表者であった私さえ、ちょうど一九日であったことを思い出すのにしばらく時間がかかったほどだ。集まったのはただ一〇年前の出来事を忘れないためではなく、当時問題に



市田良彦

1957年西宮市生まれ。神戸大学国際文化学研究所教授。専門は社会思想史、特にフランス現代思想。最近の著訳書に『ルイ・アルチュセール——行方不明者の哲学』（岩波新書）、フランソワ・マトゥロン『もはや書けなかった男』（航思社）、『ポスト68年と私たち』（王寺賢太と共編、平凡社）など。

なっていた東京大学当局による学生処分を「外庄」をかけた「つぶす」ためだった。文学部自治会室での失火事件を理由にした自治会活動家数名に対する処分が、「我々」には東大闘争一〇年に対する当局の側からの実践的「総括」であると見えていた。ならば反撃は「全国」規模で行われねばなるまい。集まる人数はともかく、姿勢、位置づけとしては。

私は集会の一週間ほどまえから、一人のこの京都から東京に出向き、集会の準備と情宣にあたっていた。集会の呼びかけは東大文学部自治会学友会と、私が委員長であった京大全学自治会同学会と、同志社大学全学自治会学友会の三者であった。実務的な準備はもちろんほとんどを東大

「情況」2018秋号(2018・10)

の人間に担われていたのだが、ことは「外庄」であつて集会は「全国集会」であるのだから、その趣旨にいくばくかでも内実を与えるためには東大「以外」のプレゼンスが準備段階から不可欠であろう、と呼びかけ三団体の「我々」は思った。わざわざ京都から事前に人が出向いてくるほどであるから集会実行委に参加しよう、という大学もあろうし（私の第一任務は他大学のオルグであつた）、東大の学内でも東大「以外」が目立つことにより集会への注目度は増すであろう。だからほんとうは同志社学友会の人間も一



ほか」であろう。当時もすでに「一般学生」——まだそんな言い方をしていた——にとつてはそうであつたらう。それでもそんな人間が銀杏並木がなり立てるだけで、最高学府の空気は少しだけ乱れた。局的、一時的にざわついた。見て見ぬふりをして通り過ぎていく学生や職員のかたわらに、当惑の凝視、ひきつった笑顔、ふざけてなのかすなおになのかアイドルを応援するような拍手を送る者。大地が揺れた全共闘はたしかに今は昔であつた。しかし「今は昔」という記憶が校舎の冷たい壁には刻まれていた。なにより講堂が、まだあの日のまま閉鎖されていた。

一人同学会

私が東京に行ったのには、もう一つ京都における事情があつた。京大キャンパス内での民青同盟相手のいくつかの「事件」により、私にはどうやら逮捕状が出ているらしい雲行きであつた。彼らのビラと、キャンパス正門前に偵察に来る私服刑事の様子で、私の逮捕に近いことはこの手のことに鈍感な私にも十分うかがえた。実際、私は東京から帰ってきてほどなく、自転車で大東路を熊野寮に向かつて一人走つているときに令状逮捕される。しかし東京の集會前に捕まるわけにはいかない。集会実行委の組織化における私の役回りは引き継ぎ不可能であつた。といつて私の身を防衛するほどの組織力が京都の「我々」にあるわけ

緒に行くはずであつたのだが、それはなにかの都合（？）でキャンセルされた。

だから私は東京大学本郷キャンパスのなかで、目的意識的に一人で暴れた。ねぐらとして提供してもらつた医学部付属病院赤レンガ病棟（まだ「医学連」の影響力下にあつた）の地下室で一人「京大同学会」のビラを作り、一人でそれを教室に撒くときには派手に「喧嘩」（相手は原理研と民青同盟）をし、東大学友会の面々に「救出」される場面を作つた。「敵」の面前で彼らが撒いたビラを回収して破り捨てれば彼らは頭にきて私を袋叩きにし、しかし大声で罵り合つていればやがて助けがやつてくるだろう。騒動になるだろう。思惑は当たつた。東大ではもうおどろおどろしいゲバ文字のビラは姿を消し、活動家の演説も大音量絶叫調ではなくなつていたから、私のスタイルはたしかに目立つた。民青同盟は「暴力集団」がもうすぐ京都から「攻めてくる」といつた論調の宣伝をして反目に回つたけれども、私としては「お、盛り上がりつつきたな」でしかなかつた。とにかく私としては、そしてたぶん当時の「我々」も私という人間が「暴力」を含め「全共闘」的なものの残滓のアイコンとして東大キャンパスと関東のその筋に知られれば知られるほど、集会は「成功」に近づくだらうと目論んでいた。私は「突出」しなければならず、服装にまで気を使つた。米軍下げ戦闘服に編み上げブーツ。今なら「あ

はなく、どこかに閉じ籠つているなどはなからごめんであり、解決策としては、京都府警がそこまで追いかけてくることはなからう、まさか全国指名手配にはなつていない、というわけで東大に逃げ込むこととあいなつた。私はある意味、京大においても一人であつたから、東京に行つたのである。守つてもらえる組織はないし、あと一週間ぐらいなら、俺がいなくてもたいして問題なからう、と。

「一人同学会」。委員長であつた二期二、三年のあいだ私について回つた蔑称かつ尊称かつ愛称である。その武勇伝を自慢話として披瀝したいわけではない。その歴史性のみを問いたいと思つている。私の「党派性」をあくまで歴史的なものとして確定しておきたい、と。だから歴史的に意味ある日付からこれを書きはじめた。しかし一人であつたからには誰にもこのおかしな「党派経験」は共有されておらず、読者には私の個人史にもつきあつていただくほかにない。私の目からなにがどう見えていたかを知ってもらふ必要がある。

「一人同学会」。寂しいものだ。私をもつともよくそう呼んだ私に近い人たちに対する私の気持ちは当時から愛憎半ばしていたし、そんな位置に立たされたことの感情的・実利的収支決算ははつきりマイナスである。語りたい以前に苦々しい。「あとはよろしく」と去つていつた者たちの顔が、たつた今も目の前によみがえる。逮捕されたことが



言葉、「もつと普遍的なものが賭けられているからやれたし、これからもまだやるべき」が、転換を如実に示していた。彼にとってその「普遍的」なものとは「生活の質」であつたり、「農民の大義」であつたりするのだが、その後、の彼とその仲間の軌跡を辿ってみれば、エコロジスト的価値観や産地直送的経済ビジョンが実際の中身であるのだった。それが彼らの「反資本主義」であるのだった。しかし、この時期の「我々」に特有の問題はそうした思想内容にあるのではなかった。少なくとも私はそう理解していた。究

新聞に顔写真入りニュースとなったことを留置場で知ったときには、これで閉ざされた道もかなりあろうし、いまさら加盟して大義に尽くそうという党派もないから、「相談役」として「就職」せんかという同僚ヤクザの誘いに乗ろうかと本気で考えた。念のため付け加えておけば、私は結局起訴さえされず、逮捕はただ私にキツイお灸をすえるためであつたらう。「有名人」にするというお灸。ヤクザの誘いを断つたのは、初任給三〇万円、五年で独立事務所、という条件で誰かを「親分」と呼ぶくらいなら、「一人」を続けたほうがよいという私の好みの問題でしかない。そもそも、私はそうなることを覚悟して学生運動に首を突っ込んだようなところがある。大学に入学したころは、運動はまだあつた。「竹本処分粉砕闘争」はやがて京大を「ガラパゴス」と世間と呼ばしめるような盛り上がりを見せていた。そのころの私は、高校生時代からの興味の延長で釜ヶ崎に入り浸つており、同学生会指導部との最初の接点も、釜日労委員長の講演会を大学でやりませんか、越冬闘争に大学からも来ませんか、と提起に出向いたことだつた。だが処分粉砕闘争の負けが見えてくると、元気のよかつた同級生たちがどんどん「引きこもり」になつていく。なんだ情けない、であつた。まだできるだろう、やるべきだろう、お前らがやらないなら俺がやつてやる。さいわい、その気分を共有してくれる数人の「カードル」はいたから、私は「突

撃隊長」の役を引き受けた。組織回りの実務を担う「スタ官」(スターリン官僚)と、あくまで温厚に活動家のメンタルな面倒をみる「アニキ」の三人で、処分粉砕闘争後の同学生会はリセットされた。思えばその体勢は三つの内部的——三人の間だけで確認された——役割符丁からしてファシズムとスターリニズムと任侠道の混交であつたか(「アニキ」の愛読書は「男組」であつた)。しかししばらくすると、その二人が「あとよろしく」であつた。私は「一人同学生会」と呼ばれるようになった。

ポスト68年の「暴力」

しかし、一人でなにもやれないことはない、というのが(ポスト68年)としての一九七〇年代後半の京大学生運動であつたと思う。個別課題を担う数々の「フラクション」と複数の同学生会系学部自治会が残つていた。みなそれなりに元気であつた。当時はまだそんな呼び方はされていなかったが、「新しい社会運動」のむしろ隆盛期であつたらう。三里塚闘争さえ、私の実感としては、七八年三・二六一五・二〇という頂点において闘争の質的転換を遂げたように思っていた。つまるところ、「国家権力打倒」が目標ならあんな闘い方はやらないほうがよく、またやれなかつたらう。当時の京大「三里塚闘争委員会」(同志社大学「三共闘」だつたかもしれない)の人間が私に思わずもろした

極的には「国家権力」を狙うがゆえに正当化されてきた「暴力」ないしある種の「実力闘争」が、「国家」からも「権力」からも離れ、晴れた宙に漂いはじめたのである。やや抽象的に図式化をすれば、管制塔破壊によって「国家」からも「権力」からも「解放」されたからこそ、「暴力」は、あるいは「暴力」が、媒的な力をもちはじめた。「国家」と「権力」から解放されるということは、「国家権力打倒」を存在原理とする党派とその内ゲバからも解放されるということだ。今日ではほとんど忘れられているし、見えにくくなつ

ているだろうが、(ポスト68年)としての一九七〇年代は、振り上げた拳が行き場を失つて内に向かうばかりの時代であつたのではない。「国家」という身体的縛りから解放された「拳」には人々を鼓舞し、結びつける力さえある、と「我々」は発見していた。管制塔破壊の解放的な効果は計り知れなかつた。「暴力」は正当性を失うのではなく「自由」になつたのである。「緑」なり「農民/地域住民」なりの普遍的価値は、この「自由」によつてできた隙間を埋めるべく事後的に与えられた「方便」だと私は思つていた。だからマルクス主義者——つまりいまだに「国家権力」の觀念にこだわる者——を自覚する私も、「農本主義」者と共存し共闘することができた。

その他の戦線においても事情は然りであつた。部落解放運動、女性解放運動、入管闘争、公害問題、障害者解放運

動だ、どこにも赤ヘル同学生会系活動家はいて、みなそれなりに元気で、「国家権力」を越えた「普遍的なもの」のために共闘し、そのことの確認として赤いヘルメットをとるにかぶり、あちこちの集會に「京大の部隊」として出現した。誰も「暴力」と「実力闘争」を否定しなかった。問題は個別的、ただし闘い方は「大衆的実力闘争」これ一本、それが一九七〇年代後半の京大同学生会であったと思う。大衆運動における暴力の是非など問われたこともない。私は「赤いヘルメット」を体現して諸戦線をつなげばよかつたのである。私という媒体が一人いれば、一九七九年一月一九日に京都から大型バス二台で安田講堂前にかけてつづけるぐらゐの動員力を、「我々」はもつていた。三里塚では五・二〇「開港決戦」の後、第四インターよりは少ないけれども、プロ青同や戦旗派よりは多い(たぶん)という動員力を、「京都三大学共闘」(京大、同志社、花園大)でほこつていた。

突撃隊長、ヘルメットを脱ぐ

私のそういうポジションは私にきわめて両義的な「人格」(あくまで政治活動上の)を与えることになった。私は「突撃隊長」として、みなを叩き、寮で寝ている「引きこもり」学生を扉を蹴破つて連れ出し、あるときには五人の部隊の先頭に立つて二〇〇名ぐらいの「暴力反対!」の暴力集団に突っ込んだ。粗暴を絵に描いたようなところ

そんなものをかぶらなくなつていた東大の活動家たちから、京都の部隊もかぶつてくれるなと要請され、私もそれをのまざるをえなかつた。人の話はよく聞く私である。本郷キャンパスで一人ビラ撒きをする私は、実はすでにかぶつていなかった。自治会室や赤レンガに転がっていたかもしれないが、赤地に白文字で「同学生会」と書かれた以外のヘルメットを私がかぶるわけにいかない。京都から持参することは、主たる任務が別のところにあるから考えもしなかつた。ヘルメットが消えたキャンパスで一人赤ヘルをかぶる勇氣がなかつたのかもしれない。けれども、「部隊」が赤ヘルで登場することは私にとつて是非もない前提であつた。そのため全国の集會であろうというぐらゐの心持であつた。たしか京都からのバスのなかにも積んであつたのではないか。集會前最後の実行委の會議でわざわざ議題にされ、根回しがすんでいたのかほとんど申し渡しという流れで決定された。東大の人間は申し訳なさそうではあつた。私はもちろん抵抗したけれども、やれ全共闘精神がどうの、やれ戦闘的姿勢がどうの、一〇周年だろ? といった理屈は暖簾に腕押しでしかなく、言葉の空回りに私の頭も急速に冷めた。

当事者と応援団

もうそういう時代ではないんだ。処分されかかつている当事者からそう言われれば、さらに、ヘルメットには内部

をもち、「キャンパスに」糞をたれる犬」とビラに書かれた。だが私はきわめて聞き上手にもなつた。調整を得意とするようになった。意見の相違があつたときには自分の方針をゴリ押しするようなことはせず、まず耳を傾けようとつとめた。だから「一人」であつても「同学生会」の人格的体現者として活動家とその周辺の者たちに承認された。二つの人格は相反しているけれどもけつして矛盾しない。行動上の合意を得るためにはとにかく話し合いを、というのは実はウソである。同意せざるをえない行動をまずやつてしまつたほうがしばしば集団的のことは上手く運ぶ。「突撃!」と叫ぶから、へつぴり腰の部隊も背中を伸ばして走りはじめ。暴力はそれ自体で「観念」なのである。「意味」が充填され、それそのものでなくともなにかを伝える効果をもつてしまう。うまく伝えるためにも、人の話は丁寧に聞かねばならない。「武装闘争はプロパガンダである」「(赤軍—PFLP世界革命戦争宣言)」とはよく言つたものだ。この命題は組織運営においても有用である。誰が出てもなくても毎朝の「メット情宣」を欠かさない私は、「大衆」と「活動家」の両方に向かつてそれを実証しているつもりであつた。内にも外にも私のプレゼンスが「大衆的実力闘争」であつた。

ゆえにシヨックであつた。一九七九年一月一九日、「我々」はヘルメットをかぶらなかつたのである。というか、もうからも反発が大きいと打ち明けられれば、私は当事者性を失つたことを一挙に自覚せざるをえなかつた。へきみたちは「お客さん」に氣を使つて黙つていたのか?。「我々」は闘争「主体」と「応援者」に分解した。一八日か一七日であつたか、革マル全学連の部隊が突然安田講堂前に現れ、集會らしきものを行つてさつと姿を消すという事態があつた。私は当時関西の革マル派からお尋ね者扱いであつたから、やつらに見つかつてはいかんと慌てて赤レンガに隠れたのだが、彼らのヘルメットを遠くから眺めつつ、かぶるメットの色こそ違え、私は現役東大文学部自治会の人間から見ればあの者たちと同類なのだろう、と寂しく思つた。宿敵であるZマーク・ヘルメットにシンパシーさえ覚えた。一九日の集會当日、私はどこか投げやりな氣持ちを抱えたまま学内デモの部隊指揮をした。(俺はなににしここへ来たのか)。あとは知らん、勝手にやつてくれ、であつた。メット着用禁止を告げられた京大の部隊のなかには、ええ? なんやそれ、と言う者もいたが、私は彼らをどう説得したか知らなかつたか、なにも憶えていない。

まことに転換期であつたわけだ。竹本処分粉砕闘争から三里塚を経て東大安田講堂前集會へ、ほんの数時間で、解放された「普遍的なもの」を体現する赤いヘルメットは「記号」性を失つた。脱ぐことに自ら同意することで、それは「普遍的なもの」、「大義」の記号から一挙に「空虚」の記号へと、

私のなかで変わった。ほかの同学会系活動家にとってどうであったかは聞いていないし、知らない。聞く気さえ起きなかつた。しかし、「一人同学会」たる私には、個別具体的な闘争目標とそれを取り巻く情勢に「ヘルメット」を従属させることは、私という存在の機能的正当性の否定にほかならなかつた。お前にはもう固有の役割はない、それは終わった、今後は「応援」に徹すべし。「利害当事者」からそう言われた気分であつた。東大の人間からそう言われたことは同時に、私にとつては、もうすぐ京大の——私が「兵隊」扱いしてきた——人間たちから同じことを言われるであろう、と予感させるに十分であつた。本稿が挿入される本誌本号は（ポスト68年）を主題とする。よつて私は、今日まで続けているかもしれない時間としての（ポスト68年）のなかの一つの起伏と陰陽を浮き彫りにすべく自らの恥多き過去を振り返っているのだが、この経験のなかに団子状になつてゐる様々な糸を解きほぐすまえに、ちょうど私のところで終わったなにかがあることの確認をもう少し続けたい。終わりに説得性をもたせるには、「一人同学会」の転落の軌跡を語る事が相応しい、あるいは不可欠であるだろう。

しかし先回りして言つておけば、「空虚」はただ「終わり」を意味しているのではなかつた。そこは私の「党派性」を可能にする同時代的「根拠」でもあつたことを、私は「メツたのは彼らである。しかしこれも当時よくあつた暴力沙汰の二コマであり、中核派と革マル派の内ゲバに比べれば子どもの喧嘩である。この件をここで記すのは、事件後の同学会内部における展開が、私に教えたからである。終わったな、と——

怪我のため吉田寮の自室で寝ていると、当該フラクションの最古参メンバーが見舞いにやつてきた。「いやえらいことになりましたなあ、大丈夫？」——まるで他人事である。「なんでこうなつたと思とるんや！」——私は自力でトイレにも行けないありさま。「こんなことまでしてくれなんて頼んでないやん！ ××（私のあだ名）が勝手にやつたんやろ！」——私は脱力した。「なんとかしてくれ」と私に頼むことは、「こんなこと」こそを頼むということであり、私にしてみればそれ以外の「なんとかする」などありえない話であつた。しかし彼らには「なんとかしてくれ」と頼んだつもりもない様子であつた。「同学会とあいつらのあいだの話やん、××（フラクション名）は関係ない」と言われて私は激高し、そいつを追い返した——「出ていけ」。同学会とフラクションの、「赤ヘル」に体现される理念——共同性とさえ言おう——と個別課題／戦線の、関係が変わつたと思ひ知らされた瞬間であつた。彼らはもう「フラクション」とは思つていない、と。ならばどうしてあまいな「相談」に來たのだ？？ 私はもう彼らの意志とは

トを脱ぐ」ことでより強く確信していくことにもなる。

分裂、分解、党派闘争

その集会の前のことか後のことかもう憶えていないのだが（たぶん後）、私はとある党派に京大構内で拉致され、授業丸々一時限分暴行されるといふ憂き目にあつた。私は三里塚闘争委員会の人間と二人で朝の情宣を行つていた。暴行した党派のことはこの際どうでもいい。問題はその原因と「我々」内部における結果である。同学会系のあるフラクション（どれかもどうでもいい）が、その党派がらみで分裂した。というか、そのフラクションのメンバー一人がその党派に加盟したことにより、フラクションBOXが彼らに乗つ取られるかたちになつた。そこまでの経緯を私はほとんど知らなかつた。乗つ取られたあとになつて、フラクションのメンバーが「なんとかしてくれないか」と相談に來た。そこは元々同学会系BOX（実は占拠した研究室）であつたことも、相談に來た理由であつたように記憶する。相談の結果、「わかつた」ということになり、これも詳細は省くが、こちらで「なんとかする」ことになつた。その「なんとかする」プロセスにおいて私はその党派に過剰な危機感を抱かせてしまい、彼らは動員をかけて先手必勝、私をテロで黙らせようとしたわけである。「先手」は言い過ぎかもしれないが、そういうエスカレーションをし

無関係に、つまりBOX問題を放置して、「軍団」に報復を指示した。というか、「やり返さなあかん」と言つてきた者たちを「軍団」化した。報復は京大から他大学へも飛び火し、相手の党派は何人も私一人が受けたのと同程度かそれ以上の傷を負い（そのように聞いている）、痛み分けのようになかたちでエスカレーションはストップした。当該「サークル」——もはやただそう呼ぶべきだろう——は勝手にBOXをあきらめた。

一人であるということは、背後を疑われるということでもある。「慧星のように登場した」と誰かがどこかで書いていた——せいで、私は最初から「ヒモ付き」を疑われた。どこの党派のか、それとも警察のか。そういうことを言いたがるのはだいたい、すでに引つ込んだ「元」でしかない活動家か「芸能界」ファンなのであまり実害はなかつたし、「スタ官」と「アニキ」からの信用が厚かつたおかげで私もほとんど気にせずすんだ。しかし、先述の安田講堂前全国集会の前後から、私の知らないところで「同学会」××派「説がひそかに党派闘争上のコマとして流され、現実的な意味をもつことになつてしまつた。この党派闘争には私もたしかに無関係ではない一面をもつており、本稿もあとで「理論的」に振り返つてみたいこの時期の重要な問題を凝縮して示していると思うのだが、ここではまだそれについては触れない。集会後の実行委員会総括会議

が型どおり終わつたあと、ある人から耳打ちされた。「同学会に対する批判が出ている」。中身を聞けば、総括会議における私の立居振舞いのことであるらしい。要するに、不遜である、まじめではない、ということ。会議がはじまるまえ、みなが部屋に入ってきてもしばらく肘をついて寝ていただろう。たしかに。疲れていたし、ヘルメット問題で拗ねていたかもしれない、すいません。いや、それだけじゃないんだ、あれは悪口オルグの一環で、「日学戦」（日本学生戦線）が、市田は「遠方」（共産同遠方派）だから用心しろ、と実行委のなかの一部の大学に触れ回っている。遠方派はファシストで、実行委は「我々」とファシストの綱引きの舞台である、こつちへ来い、という次第。なにに來いかは言うまでもない。日学戦を構成する一戦線になれ、だ。実行委の主要メンバーのなかにはたしかに日学戦の人間がいた（私は彼のあつせんで赤レンガ棟地下室を使うことができた）。彼らが実行委は日学戦のイニシアチブのもとにあると語って／騙つても、一〇〇パーセントの間違いではない。

「路線」とは？——学生戦線の統一問題

「市田＝遠方」説には「はあ？」であつたが、疑われる理由に心当たりがないわけではなかつた。私の「師匠」的人物が、東北大から京大に來た遠方派の人間と親しかつ

頼まれたからだと思う。私はS共闘の二人の古参活動家を人格的には信頼し、彼らも私のことを同学会指導部として認めてくれていた。彼らは私が「ファシスト」呼ばわりされることに心を痛めていたに違いない。ちなみにその二人のうち一人は、東京からやつてきた日学戦首領の実弟である。弟が兄を説得してくれたのであろう。しかし兄は噂の流布にかんしては頑として認めず、話は平行線に終わった。否、結論なしの尻切れトンボ。

ほどなくして、私は同学会部隊としてのS共闘とL闘を失う。遠方派がL闘BOXを襲つたのである。夜間、人がいないときに侵入し、物品を破壊して壁にペンキで落書きしていった程度であるが。日学戦がそれにより私をどう規定したかは知らないが、S共闘とL闘は京大から撤退していった。合わせて五人の純正日学戦「黨員」（なんと呼ばばいい？——すでに「立志社」を名乗っていたから「社員」か？）だけの話だが、彼らは二つの学部の「核」であるには違ひなかつた。その彼らがどこかに消えた。おまえがいびり出したようなもんだとも言われたが、そんなつもりはまつたくなく、しかし疎ましく思っていたことは事実で、彼らの新「路線」に冷淡な私が彼らを「労働力」や「兵力」としてこき使うような場面も多かつたから、彼らのほうは遠方派にいびり出されたと思つていたかもしれない。

先に名を秘した「サークル」と私のあいだの矛盾は、い

た。「日学戦」は京大内では理学部共闘会議（S共闘）と文学部闘争委員会（L闘）を手中に収めており、関東では党派として川崎幸病院の「労使紛争」をめぐつて遠方派と敵対関係にあつた。そして私は京大において、S共闘とL闘を疎ましく思ひはじめた。その疎ましさにも先に示唆した「理論」問題が伏在していたのだが、直接かつ最大の要因は三里塚における団結小屋問題であつた。彼らは自分たちだけ別の小屋に行くと言ひ出したのである。どうか、日学戦は党派として一個の小屋をかまえ、「学生戦線の統一」を強く主張しはじめた。とにかく、私としてはその「統一」を偽情報により進めようとする日学戦に頭にきて、京都に帰つてL闘BOX（そこは私のねぐらの一つでもあつた）に怒鳴り込んだ。誰がそんなことぬかしとんねん、責任者、出てこい。数日後、東京から日学戦のボスがやつてきた。その後、各種選挙で当選請負参謀として名を馳せ、ある議員の娘婿になつた人物である。「我々はたしかにオルフェをファシストと規定している」。オルフェとは「オルフェ旅団」のこと。遠方派が用いた冗談半分の組織名の一つである。オルフェがファシストだとして、それで？俺はファシストか？「我々は同学会をファシストと言つたことはない。噂の出所は我々ではない」。しかし××さん（先の「師匠」）のことは遠方派だと思つてますよね。「知らない」。彼がわざわざ出向いてきたのは、S共闘から

わば個別戦線と共通路線（とりあえずそう言つておく）のあいだのそれであつた。両者が個別—全体の協調関係を保てなくなつたという矛盾であつた。それに対しこの日学戦事件において露呈された矛盾は、共通路線同士のあいだの矛盾のように見えて実は違う。日学戦ははつきり「路線」をもち、それを「党」へと実体化させようとしていたが、つまり彼らにはたとえ京大一個に対してであれ適用すべき明文化された「共通路線」がはつきりあつたが（彼らはそれを「教育学園闘争から社会主義へ」とスローガン化していた）、私は彼らとの半ば自覚的な暗闘において、はつきり自覚した。いかなる「共通路線」ももつべきではない。先に書いた「大衆的実力闘争」これ一本、とはそのことだ。ヘルメットに拘る点といい、私の「路線」とは闘争スタイルの特有性にほかならず、個別課題における具体的争点に、「暴力革命」を先取りしたやり方で「勝つ」ことそのものが路線であつた。いわば戦術化された「前段階武装蜂起」。そのように立て看で非難されたこともある（「一般学生」から！）。世界情勢の分析はおろか、「社会主義」もそれには不要。遠方派はそんな私を「肉体派ブランキスト」と呼んでいた（中核派に対する彼らの規定「肉体派トロッキスト」のもじりか）。無内容な暴力主義者と呼ぶのと大差ないだろうが、暴力の駆使に知恵を尽くすという点で、暴力に生き方の倫理を見るアナキストや暴力を美的に

礼賛するロマン主義者とは異なる。中核派との違いは……あとに回す。

とにかく、私は竹本処分紛争から三里塚闘争にかけて数年の間に「解放」された「暴力」に、「革命」以外の中身を与えることを拒否していた。ほんとうの革命はそれが到来するときまで来ないから、それまでは「革命的」であるだけでよい。中身はなにもないほうがいい。そこを別のなにかで埋めることはほんとうの革命に対し非礼である。空っぽのなにかが悪い！ほんとうにそんなふうを考えていたのかと疑われそうだが、七九年一月一九日、デモを終えた解散集会のよりのアジ演説で私は実質的にそう述べた。噂まで流していたとは知らなかったものの、日学戦が「路線」による学生運動の統一」を実行委周辺で呼号していたことは周知であったから、それを念頭に置きながら、「路線」によって学生運動を上から統一するなどナンセンスである。今この闘争に勝てた者だけが統一を果たすであろう。大衆の実力闘争によって〈勝つ〉ことが〈我々〉の路線である。日学戦に反感をもつ者には拍手喝采であった。

同学会スタイルの歴史性

とはいえ現実には、「個別戦線」と「路線明文化」路線の両方が「私の同学会」から離れていったのである。私の人格のみに代表される空虚な赤いヘルメット群に、同学会

うる「同学会」路線に反する。先述の「闘争スタイル」とは、この体現のかたちにはほかならない。「スタイル」において、中核と革マルはまさに同一党派、革共同でしかなかった。キャンパスに日常的に不在であるのだから。彼らには京大は「シマ」ではなく、「シマ」をもつことは、ポツダム自治会であることからくる制約にとどまらない「同学会スタイル」の本質を構成していた。要するに、「サークル」に墮すことはしたくなかったのである。「我々」は京大において当局とならぶ「権力」でなければならなかった。そこに「地域権力」としての三里塚空港反対同盟やヤクザとの親近性を見ていたと言つてよい（ここらあたりについてもまたあとで立ち返る）。

私の失敗

その「権力」の移譲に私は失敗した。当然だろう。「一人同学会」はすでに字義通りの一人になつていたし、私もどのようにして個別戦線でも看板だけの「路線」でもない党派性を次代の指導部に「教える／伝える」ことができるのかまったく分からなかった。その点は企業経営やヤクザの「組」運営とまったく同じであろう。特定の人格と深く結びつきすぎてしまった組織を、その人格を越えてどう生き延びさせるのか。「制度」に依存しない自立／自律組織の固有性をどう継承・持続させるのか。答えはないだろう。

は墮した。「墮した」と言われて不満の元同志もいるだろうが、「一人同学会」をあとからどう規定しようとするの勝手である。好きに規定する権利を私に与えたのは諸君である。私から去つていった「スタ官」と「アニキ」のその後が私の認識を裏書きしてくれる。「スタ官」は大学を出て部落解放同盟になれば「就職」するようなかたちになった。「アニキ」は彼の仲間とともに新党派を立ち上げた。私のこうした認識は運動をめぐる「私的総括」——全共闘について世に溢れているような——ではない。一人で「総括」する権利と義務を与えられてしまった、そしてそれを引き受けてしまった「人間」運動体による「史的総括」である。私の悲惨と滑稽は、同学会の代替わり問題において極まった。いくら党派性をもつていたとしても、また、その党派性がいくら既存党派のそれと性格を異にしていたとしても、同学会はしよせん学生自治会である。いつかは代替わりしなければならぬ。学籍があるだけの幽霊学生を現役学生と言ひ募る党派のようなまねはしたくなかった。彼らのなかには一六回生などという者もいて、ごく形式的には、中核派も革マル派も自治会構成員としては同学会派であった。私のいた経済学部では、学生大会前になると前進社と解放社の支部に電話して（「執行部提案に」賛成でいいよな」と確認していた。「幽霊」として院政を敷くことは、理念を「身体」に体現させてはじめて「路線」と言い

だから私の恥晒しはここで終わつてもよいのだが（というか終えたいのだが）、ことは政治と歴史の問題である。普遍的な問題である。「一人同学会」というステージを越えて私が考えようとしてきた問題そのものだ。ステージの断絶を確認するためには、その連続性もまた同定されねばならない。一人の同じ人間にしか、私は変わった、もはや同じところに止まっていけない、と言えない。とはいえ、この連続性の同定は今の——別のところにいるつもり——私にとつてのみ必要なまさに「私的」なことがらに属し、「史的総括」のほうは、それをどう読むか、読めるかは読者諸氏の手に全面的にゆだねられる。私にとつては、どうでもよい部類のことがらだ。ただ、私の考える「普遍的」問題は、それを書いておくと私に命じる。否、他人からの求めに応じ書いてもいいだろう、と私に許す。親しい友人「同志」に向かつて「俺が党だ、それで悪いか」と嘯いたそのころ、その「思想」の中身には一定の普遍性があると今の私もまた一定思っている。歴史が私に強いた、あるいは可能にした「党派性」とはなんであったのか、それは私を超えざる歴史問題であるだろう。アマチュアボクシング協会の会長も言っていたではないか。私は歴史の男です。

指導部を担う人間はかなり無理をして選んでしまった。彼らはそれを引き受けると言ってくれた。だから私もそのときは、あとは彼らの考えと力量次第であると自分に言い

聞かせ、まずいことになるだろうと予感したものの、放置した。求められれば意見ぐらいいは言ったが基本的に沈黙し、私は悪い予感を払拭するため、あるいは良心の疼きを振り払うため、勉強に埋没した。ほかのこともやったがそれは本稿の主題からはずれる。私がほんとうに失敗を痛感させられたのは、かなり年月が経つてから、中核派全学連副委員長福島慎一郎が京大構内で殺されたときだ（一九八六年）。彼は私が選んだ新指導部の一員ではないが、その周辺において、私が実はもつとも期待していた人間であった。（彼が活躍するようになれば……）。知っている人は知っている人だろう。福島はしかし私の期待とは異なり、中核派になった。新指導部その他数名の人間とともに同学会を「脱走」——私の気持ちとしてはこの表現が適当だった——して中核派に加わった。キャンパスから文字通り姿を消し、同学会は一瞬にして消滅した。

中核派の二枚舌

私の引退の背景には中核派との党派闘争もまた横たわっている。身を引く決意と引く仕方は「一人同学会」にはこの身一つの問題でしかないが、私はこれ以上続けられないように中核派に背後からされたのである。そこにはたぶんS共闘の人間もかかわっている。二つの党派のあいだに連携はなかつたろうが。要は切り崩しにあったのである。「一

動」のために中核派に加わったという経緯もあって、私からすれば同学会シンパであった。私としては、彼らとときどきおしゃべりするだけで、活動家の引き抜きが止むというおもしろい「デイル」であった。しかし裏を返せば、おもしろいと感じる、止んでほしい、と願うほど私が組織運営に自信をなくしていたということでもある。「運動で引く張る」式のやり方が機能しなくなっていたわけである。

中核派のもう一つの方針は言うまでもなく、従来どおりの左翼反対派方式である。私の窓口とは別の複数の人間が、それを続けていた。私は騙されていた。オルグされている人間も、当然そのことは私に黙っていた。オルグされていたのは私が選んだ新指導部とその周辺の活動家および熊野寮生であった。そのオルグが成功してしまう。

騙された感のせいで、私は長く、中核派が同学会をつぶしたと思っていた。しかし同時に、中核派に流れた「若いやつら」——私にはそうだった——は、明文化された路線とそれにもとづく指導の不在に耐えられなかったのだ、とも。S共闘、L闘の者たちと変わらない。私の党派性は、革共同と日学戦のそれに敗れたのである。引退したころの私は、活動家になりたてのころの合宿で上の者から言われたことをよく思い出していた。「看板はあつたほうがいい」。私とその「看板」を次第に私自身と同一視していったために、福島は死んだ。彼は同時期に中核派に走った人間のな

人同学会」の与党であった複数の学部闘争委員会が、私の「指導」に反旗を翻しはじめた。具体的な論点はもう覚えていないが複数あつた。おかしいな、と思つていたら、もつとも信頼していた何人かが、「××（私のあだ名）はもうだめだ」とこともあろうに中核派とS共闘の人間に語っているという。それを中核派の人間から教えられた。中核派のなかには当時、同学会との関係をめぐって二つの方針があつた。一つは私との関係を重視し「共闘」する。といつて共闘の実質はほぼなにもなく、基本的には、こちらがキャンパス内での革マル派の動きを彼らに教えてやりさえすれば、彼らは同学会を「京大学生運動に責任を負う主体」として認める、ということである。しかしこれは彼らが京大においては、彼らのいつもの組織戦術を行使しないという意味をもつていた。左翼反対派として主流派批判を行い、活動家を引き抜いていくという革マルと同じやり方である。そう書けばたいそうに聞こえるかもしれないが、つまるところ、表と裏で「一人同学会」の悪口を言わない、ということだ。私が窓口として情報を提供するだけで、彼らはほかの活動家をオルグしない、接触もなるべく避ける、と私の窓口は確約した。提供する情報などたかが知れているし（いつ何人がキャンパスに登場した、という程度）、彼らもそんな情報にほんとうは期待していなかつたはずである。彼は元同学会系活動家であり、「大衆運動としての学生運

かでもつとも若く、耐えられないほどの同学会経験をもつていなかつた。「それにもかかわず」であるのか、「それだから」であるのか、彼には運動への純粹な熱があつた。二枚舌を弄するような政治性をもつていなかつた。「脱走」したと私が思った人間について、私は、いずれ中核派にも耐えられなくなるだろうと思つていた。何人かは実際すでにそうなつた。けれども福島は「出世」するだろうと思つていた。その通りになり、彼を中核派に連れていった、私にしてみれば「脱走組」は彼を中核派にいわば置き去りにした——これが死の報に接して私が抱いた悔しさの図式である。私と「脱走組」は主犯革マルの共犯にほかならない。

ポスト（連赤）新左翼

私の党派性をそれ自体として切開すべき頃合いであろう。私より年長でそれなりの新左翼活動家経験をもつた人には、ここまでの書きぶりから、私の党派性の一端がほんやりとあつてもすでに見えているはずである。書くものにこそ党派性は現れる。ある時期の中核派の党派性は「反帝反スタ」のスローガンよりも、『前進』の『週刊プロレス新聞』性に認められるといった具合である。私の場合には、文章に現れる党派性を作つたのは、滝田修（＝竹本信弘）の『ならずもの暴力宣言』と京大C戦線（Cは教養部の意）のパンフレット類（C戦線から生まれた側面をもつ

マル青同——後述——のごく初期を含む)、そして長崎浩のとりわけ『結社と技術』である。そんな諸テキストの混交から「一人同学会」の頭と体、すなわち「口」はできあがった。本稿のスタイルは、そんな人間の老後にはどんな語り口が相応しかろうと模索したとりあえずの結果である。そこに私が研究対象としてきたルイ・アルチュセールの回想録『未来は長く続く』の風味が感じられるかもしれないことは、意図せざるおまけにすぎない。とにかく本稿はそれ自体として数々のテキストの「地口」のつもりである。スタイルを人工的に構成する努力が、苦い経験への接近に必要な距離を取らせてくれる。

それらのテキストは長崎の著作を除き、すべて「連赤」以降のものである。私の新左翼本読書体験の発端には、高校生時代の『蜂起貫徹戦争勝利——大菩薩峠冒頭陳述集』がある。といって、それに影響されて心情赤軍少年になったわけではまったくない。「なんじゃこれ」でほぼおしまい読めた代物ではなかった。「蜂起」や「武装闘争」といった語に込められた情念だけが伝わってくる。その情念には多少感化されたかもしれない。しかし釜ヶ崎に出入りするようになったのは、「釜ヶ崎赤軍」とは関係がない。河内音頭で踊る夏祭りだ。赤軍派の結成から連合赤軍事件にいたる歴史が私にとって差し迫ったものとなったのは、大学に入って以降のことにすぎず、一年生のときに同学会から

メットでマル青同が元気にやってきました、党中央に敬礼!」とか「内戦にそなえてラジオ体操!」とか。はたまた五人で軍隊式行進をして——コール&レスポンスは「蜂起!」——「貫徹!」——「闘争!」——「勝利!」——生協食堂の食券売り場に行き、「マル青同、食券買います、ちゃんぽん五つ!」(なぜかいつも「ちゃんぽん」とか。とにかく笑わせてくれる。同時に、自覚的に漫画を演じているとしか思えないマル青同が、C戦線を母体としていることに不気味なものを感じずにはいられなかった。「連赤」の一つの総括として、学生運動からやり直したいと「一人」になる前の同学会に言ってきた。私と「スタ官」と「アニキ」の三人で話を聞く儀式的面談をやった記憶がある。私のゲバ技術は彼ら元マル青同仕込みである。この党派は岡山大学ですでに寮生殺人事件を起こしていたが、それさえ「連赤」の戯画のようにしか思えなかった。言うことを聞かないやつを車で轢き殺したのである。そのときの車が警察から返還されてきたとき、彼らは熊野寮に神主を呼んでお祓いをさせている。ウソのような話だがほんとう

距離を取っていたのも、この歴史からすれば「学生運動」はなんとなく「ぬるい」、ポスト(連赤)新左翼に相応しいのか? といった感覚からである。

先述の合宿では京大学生運動史、特に一九五九年の同学会再建以降の運動史と、共産主義者同盟(ブント)の理論史が概観された。合宿から帰ってくると、私はブント史にのめり込んだ。先輩に頼むと、いくらでも歴史的資料は出てきた(生き字引のような「老人」がいた——せいぜい二〇代後半なのだが、「我々」は尊敬を込めて「としより」×「ちゃん」と呼んでいた)。同時に、この歴史に深くまわりついでいる宇野派経済学と廣松渉の「哲学」なども読みはじめた。勉強せずにおれないのはどこかエリート意識の抜けのない京大生の弱点である。勉強すればするほど、それが分かった。なぜなら、これら妙に肩に力が入った論述すべての一つのゴールを、「我々」はすでに知っているからである。「連赤」だ。結果から見れば、これらの「理論」のゴールは兎戯に等しい自滅ではないか。殺した者も殺された者も、「お坊ちゃんお嬢ちゃん」ではないか。正直、どこで「革命」は「ごっこ」に変わったのかと思わずにいられなかった。

同志殺しだけからそう思ったのではない。目の前にいる「マル青同」(マルクス主義青年同盟)が日々、そう思わせてくれた。「今日もアイロンのかかった学生服と赤いヘルメット」の悲惨とマル青同の滑稽と、数多のベリール・シリアスなマルクス主義文献との関連やこれいかに。転換点に「共産党赤軍派」があることは明白である。赤軍の実践的総括とはなにか。私は問いを胸に深く刻まずにはおれなかった。

竹本処分粉砕闘争で「大人」になる

「ならずもの」滝田の意味は少し違う。竹本処分粉砕闘争は「我々」を大人にしてくれた。「党」を否定する滝田の「パルチザン五人組」が、ローザに依拠し「自然発生性」を原理とするという建前など、少なくとも私は鼻で嗤っていた。あの映画(『パルチザン前史』)のラスト——「五人組」が人民のなかに潜入すべく日雇い労働に汗を流す——が「やらせ」で、出演者は「うどん食って帰ってきた」と知っていたし、竹本がブントに入れてもらえなかったこと、目立ちたがりのお調子者であったことは、「我々」のあいだでは日々の常識であった。彼は「全共闘で舞い上がった道化」という位置づけであった。実際の竹本信弘氏がどういう人間であったかは知らない。「我々」がなぜ彼の無実を確信していたかという、いかにもスパイ菊井に乗せられるような人物、という人格規定が数々の逸話とともに伝承されてきたからである。ああなつてはいけなから、「我々」はちゃんと闘う。これが朝霞自衛官殺害事件にかんする

「我々」の実践的総括であったときえ言つていい。とはいえ私は、パルチ残党のY氏を通じて、「ならずもの」の魅力にも気づかされた。もはやたまにひよっこり大学に現れるだけの山小屋番人であったが、彼のやることなすことが「アジテーション」であった。周囲を一瞬にして非日常の空間にするアウラを彼はもつていた（風貌がまず異様であった——無精髭の浮浪者）。なにより彼は自分がお調子者であることを知っていた。けつして偉そうにせず、「使つてくれ」という態度であった。すぐにいなくなるので「兵隊」にはできなかったが。私はこの「ならずもの」をどう生かすか、彼が目の前で代表している「パルチ」的なものをどう「大衆的実力闘争」のなかに取り込み、飼ひ馴らし、コントロールするかを、「パルチザン」の実践的総括として考えるようになった。それが「一人同学会」であったと言つてもよいほどである。要するに私はどこかで彼を真似ようとしていた。演出者と演技者に同時になろうとしたのである。「子ども」である竹本とY氏に対して「大人」になるべし。ただし「大人」の私には、「子ども」が私しかない。「連赤」とマル青同を兎戯と見下しつつ、竹本を道化と嗤いつつ、私もまた自らの「子ども」性を一定解放させようとした。ローザ的「自然発生性」に対するオマーヂュのつもりで。それを「大人」たる私のコントロール下に置くことでレーニン主義を実践しているつもりで。なんのことは

「白樺派」とはなにか

「白樺派」は「我々」の一方的な命名であり、「共産同白樺派」などという集団が実体として存在するわけではない（そう受け取っているらしいネットの書き込みを見て愕然としたことがある）。T氏が経営する吉田山のスナック「白樺」に出入りする、六〇年安保闘争から京大全共闘ぐらゐまでを含む世代の雑多な元活動家たちの総称にすぎない。その内訳は私の「政治的」視点からは二つに大別された。

(1) T氏を中心とする、「政治」まつりごと「お祭り」の一派。実質的にはT氏一人かもしれないが、彼に感化される西部講堂周辺の若者は多かった。人脈も全国に広がっていた。彼は三里塚で行われた「幻野祭」（一九七二）のプロデューサーであり、彼にとつてはたぶん「イベントを打つ」ことが政治であった。先のY氏はこのT氏により、一九七二年の再建同学会の「スタア」に指名された（委員長になる）。T氏は逃亡中の竹本と連絡が取れるという触れ込みであったため、「我々」（そのなかにはまだT氏も含まれる）は竹本を総長団交の場に連れてくることをハイライトに闘争プロセスを組み立てた。処分理由は「竹本と連絡が取れない」（＝思想処分ではない）ということであったから、本人が出てくれば処分理由が消滅する、という論理であった。「竹本は助手のくせに大学に出てきてないじゃ

ない、キャンパスでトリックスターになればよいのである。そのあまりに馬鹿々々しい「実践」の数々については報告を控えさせてもらいたい。私にはもう記す勇気がない。

それに、Y氏を範とする私の「子ども」大人「実践は「一人同学会」だけにかかわることであり、竹本処分粉砕闘争が「我々」を大人にしたと先に記した所以は、そこを大きくはみ出る。闘争の最終段階でまさに「我々」は思い知らされたのである。「我々」は子ども扱ひされていた、と騙され、おだてられ、操られ、政治のコマにされていた、と。一定の人々には知られているだろう。「我々」を子ども扱ひした者たちを「我々」は「白樺派」と命名した。その間の経緯については、先の私の「師匠」が原文を書き、私がリライトしてパンフレットにまとめた『総括——竹本処分粉砕闘争』（タイトルは少し違ったかもしれない）を読んでもらうのがいちばんよいのだが、あいにくそれはもう私の手元にすら一冊も残っていない。また、いまだにその細部に疑いの目を向ける文字通りの老人たちも多いことからむしろ「我々」私にとつて事態はどうであったかを図式化して述べておくほうがよいだろう。歪んでいようがいまいが私の目に映った像の再現として。こんなふうには「我々」は受け取り、ここで言う「我々」になった、したがって「一人同学会」の党派性を作ることにもなったという証言として。

ないか」と総長が学生を説得するはずの場に本人が出てくれば、確実に盛り上がるではないか。しかしT氏が竹本と連絡が取れるというのは真つ赤なウソであった（事後に竹本氏に確認した）。Y氏を介してT氏の「質」——イベント好きで時に二枚舌を使う——が私に流れ込んでくるかもしれないことを私は否定しない。

(2) 京大出版会を自らのイニシアチブで再建したいKY氏を中心とする面々。彼は谷川雁を熱愛するヘーゲル研究者の顔をもっており、当時は「京都大学卒業生名簿編纂委員会」という団体を作つて糊口をしのいでいた（当局公認団体であった）。彼の周りには「共産同RG派」榎原均が獄中で執筆した『資本論』研究書を出版しようという人や、旧京大出版会発行の新左翼理論・情報誌『序章』を再刊したい人などがいた。名簿編纂委と学生部は建物も近く、両者はツーカーの仲であった。私は大学院に進学することによりKY氏の後輩になつてしまつたが、両方の指導教官にあたる平井俊彦から「おまえの書くものはKYにそっくりやな」と言われて閉口したことがある。観念的で理論偏重の傾向が強い、という意味らしい。とにかくKY氏には普通の意味における政治的色気や野心はなく、そのせいか、彼および彼に近しい人々は「我々」をときに露骨に軽蔑していた。無思想なゲバルトをいつまでやっているんだ、という態度。

二つの傾向に共通しているのは、「我々」の処分粉砕闘争を早くから見限っていたばかりか、その「敗北」をこそそれぞれの目標に利用しようとした、という点である。暴走する「子ども」たちを抑え込んだという業績を手土産に。その共通性ゆえの、「我々」からの「白樺派」規定である。T氏の場合には、京都府政に嵯川共産党政権に代わる「社民」政権を作るフイクサーになろうとした。知事候補のバツターが処分の当事者中の当事者、岡本道雄総長である。KY氏の場合には、京大出版会再建をめぐる対抗馬であった生協（共産党系である）を蹴落とすための、当局への手土産である。そんな「目標」はお前らの妄想だ、負けた腹いせの言いがかりだと散々言われてきたし、私ももう認識の当否を争うつもりはない。ただしT氏が「我々」に「竹本を握っている」と言い続けていたこと、KY氏の手下が「序章」を再刊できれば勝ち負けはどうでもいい」と言っていたことはまぎれもない事実である。ここでの問題は「我々」と「白樺派」の断絶による「我々」の党派性の確定である。主観的でしかなくとも、あるいは主観的であるからこそ、「我々」を「彼ら」と彼らが代表するものから分離させた客体化のプロセス、その動因、動機である。分裂はどう理念的に昇華されるかの歴史的ケーススタディとして読んでいただきたい。

きればいいね」という程度の「期待」の表明をもって「勝った」と言わねばならなかったのだから、格好をつけただけである。大山鳴動して鼠一匹。かくして「我々」のあいだでは「消耗」という言葉が蔓延した。吉本隆明を読んで「大衆に回帰する」——なにもしないの意——と言いつ出す者も現れた。

「白樺派」に対してもやることはあった。名指しの絶縁ピラを撒かれてもT氏はこちらから見えるかぎり意気軒高、現役学生のあいだ、特に西部講堂関係者のなかに影響力をもっている。彼としては、なら「お祭り」に純化するぜ、か。人脈を生かして「文化人」になるぜ、か（名前は忘れたが普通の商業雑誌にエッセイを連載しはじめた）。私は彼が企画したり背後にいたりする西部講堂のイベントをすべてつぶすつもりで、関係者を恫喝して回った。「白樺」に酒を飲みに行く者はすべて「敵」であると宣言した。京都政界への進出絡みで「白樺bis」のようなスナックが木屋町にできていたが、お歴々の集う「チボリーの家」というそのたまり場というかより市民派的(?)な交流の場は、「我々」の応援団と化していた遠方派が襲い、破壊した。ただしそれは私の指示なり要請によるものではない。日学戦による「市田⇨遠方」説の一つの根拠となった事件であるので、はつきり記しておきたい。手足をもがれたT氏はアルコール依存を強め、私がたまたま百万遍ですれ違った

「子ども」になって暴走しなければならぬ

分裂の片方である「我々」は「抑え込まれた」のであってはならなかった。評議会決定により処分粉砕闘争が収束に向かつてはいけなかった。「子ども」扱われたことに頭に来た「我々」は、「彼ら」と同列に並ぶ「大人」として、まずどうであつてはならないかを冷静に見定め、決然たる「子ども」として暴走状態を更新した。「白樺派」との組織的断絶はピラ一枚の宣言で済む話であるが、実際的な断絶は「抑え込まれていない」ことで実証するしかない。評議会決定において賛成票を投じた評議員に対する「放逐戦」である。彼らに授業をやらせないという、こちらにとつても消耗を強いられる闘いであり（なにする全学部にまたがるし、阻止にやってくる民青同盟員といちいち暴力沙汰になる、したがって逮捕者も出る）、その過程で同学会活動家は櫛の歯が一本また一本と欠けるようになっていく。私が「俺がやってやる」と介入を決意したのもそのころである。処分そのものについては、覆すことはできなくとも一定「勝った」と言えるメルクマールをどこかに設定しなくてはいけない。それは経済学部当局との団交による「竹本氏再雇用声明」の獲得に置かれた（その方針を主導し当局との裏交渉したのは私ではない）。声明は獲得されたものの、「竹本君といつかまたともに研究と教育がで

ときには見るからに衰弱し、杖に頼つてよぼよぼ歩いていった。ほどなく寝たきりになり、死んだ。私は彼の店の客であつた学生たちから、お前が殺したと言われた。しつこすぎたという思いは私にもある。数十年後に彼の弟に会ったときには、まともに目を見れず苦笑するのが精一杯だつた。

「俺がブントを奪つてやる」

「白樺派」との断絶は、私のなかで赤軍派問題と合体した。T氏は「あさま山荘銃撃戦断固支持」の立て看を出すような人でもあつたのである。日本赤軍のことも「後輩」扱いであつた。私は、一言でまとめれば「俺がブントを奪つてやる」との思いを固めた。彼は「関西ブント」として赤軍派の「親」気分であつたから、「我々」など「孫」同然であり、その彼に「大人」として伍して彼を「裏切者」認定するためには、こつこそ「関西ブント」本流だという気構えが必要のように思えた。半ば冗談めかしてそんなことを言い合っているうちに、私のなかでは、一九五九年の再建同学会以来の同学会史とブントの歴史を合体させたような「理論」——想像的図式にすぎないかもしれない——ができてしまつた。そしてそれはまた、実在しない「党」（⇨ブント）の一員として振舞うことこそ、「党」を正しく在らしめる仕方であるというおかしな信念を私に植え付けた。綱領をもたない党——綱領を公表しない非公然党ではな

く、俺は党員だが綱領などないと党員が公然と言う党——だ。綱領をもたないのだから「同志」——綱領を盟約の証として結ばれた者——などいない。「一人」でなければ「党」と言えない党である。要は「一人同学会」を「党」として正当化してくれる党観だ。ただしいつでも他の同様の「一人」と共闘する用意のある「一人」党である。

先走りすぎた。出発点は関西ブントによる安保闘争の総括文書、「政治過程論」である。先述の合宿における主要テキストの一つであった。私はそれを、「戦術左翼」こそ左翼であり、左翼に「経済学」は不要であると教える文書として読んだ。個別課題の個別性を突き破る技術が戦術であり、突き破って革命に至るプロセスをコントロールすることが左翼の政治である、という「教え」を、「政治過程論」から引き出した。大衆運動としての六〇年安保闘争の発展過程と、七〇年代後半に問題であった諸「個別戦線」の融合過程とを同一視することを可能にする鍵として、「政治過程論」の「戦術」概念を受け取ったのである。ほんとうにそう「教えて」いるのか、そう読めるのか怪しいだろうが、そのように読む誘導が当時の同学会指導部つまり私の先輩にはあつたと思う。彼によれば、赤軍派の「前段階武装蜂起」も連合赤軍の「銃による殲滅戦」も、「政治過程論」から演繹される戦術主義にほかならなかった。実際そうであつたらう。なにかの「壁」を破れば「向こう」に行ける、

よいではないか。社会主義の看板は剥げたのだから——「スタ」か「社帝」かで争っている！——共産主義もやがて色褪せるだろうし、それなら褪せようもない無色透明でよからう、という程度の思想ならぬ心持である。そこに、秩序派／市民派は奴隷であつて「あらゆる犯罪は革命的である」という平岡正明的「気分」も加味されていたかもしれない。もちろん「ならずもの」こそ素晴らしいという滝田の美学も。とにかく、闘いの大義に「闘うこと」以外のなにがいののか？ という「思想」である。

誤解なきように言っておけば、これはニヒルなアナキズムではない。ニヒリストでもあるアナキストは「向こう」を「黒」に物象化している。「黒い空虚」がほんとうにあると信じ、爆弾を投げる。東アジア反日武装戦線との違いも、「我々」にはまた問題であつた。私には同戦線の表明された思想を額面通りに受け取ることがどうしてもできず、彼らはただ爆弾を愛しているのだからとしか思えなかつた。私の言う「向こう」の「空位」は、信や愛とは無縁の、むしろ一種の日和見主義を積極的に採用させるようなものだ。どんな思想も「いまの看板」にすぎないと思ひなす立場。「看板はあつたほうがいい」という先輩からの「訓示」をそういう方向に一步進めた。三百代言ウエルカム、ただしいまある「壁」を破ることに役立つのなら。つまりこの日和見主義、「向こう」にかんする唯名論（「共産主義」の実体性

大衆はついてくる、我らに合流すると愚直に信じていたのだから。「政治過程論」も、最後の「壁」を破る「大戦術」だけがなかつたと言っているようなものであるから。赤軍派の文書類にはその手の論理、「政治過程論」のそうした継承の仕方が透けて見える。「過渡期世界論」という「経済学」的世界認識など「あとづけ」だ。合宿における議論は、「壁」を「機動隊の壁」に物象化してどうする、というところで終わつたように思う。その先はなかつた。「機動隊の壁」を破れば「権力」に接近するのであれば、無理せず国会議事堂に歩いて入れればよからうというジョークはあつたか。大阪万博で太陽の塔を「占拠」したヘルメット男は、赤軍思想の「真理」を言い当てているのでは？（これはいま言っている）。

壁の向こう、看板としての思想

けれども私は、「壁」の物象化を避けるには「壁」の「向こう」を空位しておくのがいちばんいい、と直観的に思うようになっていった。理解してもらうのは難しいかもしれないが、私もそれを思想や理論などと主張するつもりはないが、そう思う私の念頭にあつたのは、ブランキの「永久運動する宇宙」（「永久運動」に「かくめい」とルビをふるべし）である。「向こう」は物質的必然性の行きつく先、人類史のゴールなどではなく、いまここにある「天体の永遠」で

を否定する）は、「壁」にかんしては冷静な分析を要求する。なにがデモや集会の動員数を頭打ちにさせているか、なにが個別課題の垣根を越えさせなくさせているか、どうすれば当局の論理を崩し、制度の裏をかくことができるか、さらには「壁」は現にあるのかとさえ、とにかく徹底的に考えるよう誘う。「空」の目的のためのプラグマティズムだ。赤軍の「情念」とではなく、ただ「壁」を破る「快楽」と一緒になつた経験主義であるかもしれない。だから私は自分が爆弾犯と二卵性双生児であるのではと思ふことも度々であつた。彼らが爆弾を破裂させるのは楽しいと認めれば、私には彼らを応援する用意があつた。ただし楽しみを持続させるやり方を考えよ、と説教したい気分であつた。「花田秀次郎」（『唐獅子牡丹』）よりも「美能省三」（『仁義なき戦い』）でなくては。「大義」は手に入らないかもしれないと考えたほうが、思考は「戦術」に特化できる。なんのためになどと考えていけば、そのうち転向する。

「壁」の「向こう」にはなにもない、名付けられた「向こう」（社会主義、共産主義……）は「看板」だ……とすれば最終的に、「看板」が「壁」であろう。ないものがあるとやいぐるめていけるのだから。けれどもそんな理屈は運動のなかで通じるわけがない。ビラに書けるわけがない。書けるのはあくまで「くを打ち破れ」、「くと連帯しよう」でしかない。打ち破つた向こうには「すべての黒牛が黒くなる

闇夜」(万国のプロレタリアート)や「全人類」と言い換えても同じだがある。では呼びかけにならないだろう。「闇夜」はあくまで、どこが「壁」か／なにか「看板」にすぎないか／誰が当面の敵で味方か、等々を見極めるための「基準」ではない。「戦術」を「大義」から自立させる基準にして、比較と値踏みをも可能にする基準。「大義」も「戦術」のコマとして考えさせてくれる基準。ただし「我々」を「実利」にかんして禁欲させる倫理でもある。この立場を守るには実際どうすればいいか、出した答えが「大衆の実力闘争」これ一本でいく、であったと言っている。「反スタ」か「反社帝」か、知ったことか。とりあえず継続革命に敬意を表して「反社帝」と言っておこう。ペトナムとカンボジアが戦争をはじめた(一九七九)におよんで、そんな「綱領的認識」になんの意味がある? いまここで「勝てる」展望も示せないで「路線による学生戦線の統一」とか言うな、である。シニスムと言いたければ言え、であった。私の不まじめと不遜を批判した日学戦はこの底意を見抜いていたのだらうと思う。私はいたってまじめであったのだが。

看板を捨てた「関西ブント」

「看板」にすがれば運動はだめになるとまじめに思っていた。サークルと大差ない「党」(依怙地なぶんだけ始末の

ことは重々知っていた。立て看に「これは立て看ではありませぬ」と書くようなものだからだ。「看板」の不在を実践的に言うためには、「看板」を不断に架け替える類の労が求められる。ソ連がだめなら中国、中国がだめなら北朝鮮、北朝鮮がだめならパレスチナ、それでもだめなら「全世界」だ。党がだめならノンセクト、ノンセクトがだめなら党。そんな「看板」書き換えはシンプルに疲れるから、自分のやっていることを嫌でも思い知らされる——(ああ、綱渡りはつらい)。中核派からはしばしば難詰された——「同学会はやっていることは党派やないか、純朴な大衆団体ヅラするな」。こうも言って同学会活動家をオルグしたくせに——「自治会ではあかんよ、やっぱり党に入らんと」。綱渡りに耐え切れなかったのが同志社の「全学闘」だと思っていた。「革命的敗北主義」とか格好をつけてはいたが、負けて消えずに「赤ヘル中核」になった。栄光の代わりに残骸を残した。ただの小セクトであるのに、自治会やサークルを「政治指導」と称して強権支配しようとした。「一般学生」を扇動してその気にさせる意欲も「技術」もとうに捨てていた。それだけで「我々」から見ればもう「赤ヘル」をかぶる資格はなかった。彼らは中核派が自分たちのことをどう裏で言っているか知っていたらどうか。全学闘は「三里塚百万人動員実行委」という中核系「大衆団体」に参加していたにもかかわらず、中核派からは「あいつら

悪いサークル)を増やすか、「看板」の錆に失望してありきたりのシニスムに陥り、「イベント」を享樂したり「利権」に走ったりするほかない、と。要は「セクト」になるか「白樺派」になるか。最初から「看板」をもたない覚悟を決めた者だけが、新生「関西ブント」を名乗ることができる。Y氏によって「再建」された「バルチ同学会」から「白樺派」との断絶によって再生した「一人同学会」にいたる歴史はそれをこそ証明しているだろう。それは「学生自治会」だったのだ。「共産主義者同盟××派」ではなかったのだ。しかし戦術左翼の「関西ブント」であり、大衆的実力闘争の「赤ヘル」であった。おまけに滝田流「ならずもの」、ただし「五人組」はなし、であった。「ノンセクト」主義、「党」否定論、アジテーター万能論、等々ではまったくなかった。それらは遅かれ早かれ「個別戦線」に埋没していく。KY氏が熱愛した谷川雁の「工作者」を見よ、「水俣」に寄り添って「苦界浄土」を寿ぐしかないではないか。太田竜を見よ、「辺境」探しに歯止めが効かなくなるだけではないか。吉本主義者を見よ、「大衆の原像」はじつとしていることではないか……。こうしたポスト全共闘的な「党」否定に對しては、「世界一國同時革命」の擁護者であり続けよう……。そんなものにはや中身はないと知っていたからである。中身がなければ害もない。

しかし、この「党」の現実態が「二枚舌」でしかない

ただの政治屋や、オルグされるのが嫌やから解散しようた」と言われていた。はつきり「解散した」と告げたそうである。自治会である同学会に解散の選択肢はない。

「シマ」を守る「我々」のグラムシ主義

この「自治会」であることが、(私我々)におそらく革共同はおろかどの実在のブント諸派とも異なる党派性を与えたかもしれない。三里塚をはじめとするあちこちに出向き、どの個別戦線においてもそれなりに応援団として認知されても、ほんとうの「革命」が目前のそこに賭けられているのでなければ、「我々」は京大を棄てるわけにはいかなかったのである。「一点突破全面展開」を実現する「一点」など、もはやどこにもなかった。空港を「爆砕」すれば即革命情勢だと言わんばかりの直言壮語を集会のたびに繰り広げる中核派が、党派の命運を賭けたような戦い方を三里塚では絶対に行わないことは三・二六―五・二〇の過程を見るまでもなく明らかであった。ブント系諸派はもうどこにも拠点のない流浪のサークルと化していた。大学を棄ててまで破るべき「壁」が大学のそこに見当たらないなか、自治会をそのまま「自己権力」(ソヴィエト)に移行させることが「関西ブント」から(私)に課された、竹本処分粉砕闘争後の任務であるように思えたのである。後退局面における一種のグラムシ主義である。ただし大学という「陣

「地」は守るべき拠点——「機動戦」の主戦場へと出ていく陣地——ではない。大学から各所に応援団を派遣したけれども、「我々」の目標は人材派遣ではなかった。「陣地」の「そと」は「国家装置としての大学」であって、そこを「食いつぶす」ことに（我々の戦術）は振り向けられるべき、と私は考えた。なんのことはない、ヤクザにとつてのシマのようなものだ。「食いつぶす」ことの中身はよく分かっているが、いなかつたのだけでも、よく分からないから、当局の決定にことごとく異を唱える厄介者でよかつた。岡本の次の総長に殴りかかられた（そういうことをする人であつた）ことは同学生会委員長としての勲章であつた。敵を同じ土俵に引きずり込んだのであるから。とにかく「二重権力」状態を現出／演出することが「一人同学生会」の目標になつた。分らないなりに、いわゆる拠点校における党派のあり方とは違う、とは思つていた。中核派も革マル派も、とりわけ後者は当局とは争わなかつたので、彼らにとつての革命は原理的に「プロレタリアートの党」たる自党派の「なか」にまず——先取りされて——存在し（党はそれ自体で「類的存在」だと規定される）、それから実行に移されることになつていたので、その間の時間はひたすら「党」の同心円の拡大に捧げられねばならず、あらゆる場所は「党」への人材供給所でなければならぬ。「闘争」は同盟員が獲得されれば「勝利」なのである。資本主義社会において

おわりに——総括の不毛

政治の経験はけつして伝承されない。ある一世代が経験した政治はその世代かぎりのものであつて、続く世代の各人は目前の課題を目にして初めて政治に足を踏み入れる。永遠の昔からあるのに、いくたびも繰り返されているのに、誰もが政治に対しては「子ども」、否、「赤ん坊」だ。だからこの断絶に抗おうとして、党派を作つたり「総括」を次世代に残そうとしたりする。朝鮮労働党における指導者世襲制は、グロテスクに見えつつ、「党」を作る本能に合致している。伝承不可能な経験としての政治に潜む本能が、「大人」として教育しようとしたら、「教訓／遺訓」を残そうとしたりする。

「大人」たちと争つた私の党派闘争は、それへの抵抗であつた。赤軍派創設から連合赤軍にいたる過程をめぐる「総括」論争は、私には全体として「くだらない」と思えた。どこで間違つたかを真摯に反省しようとしていくからである。それが分かつたとして、「時計の針を戻そうというのか？」であつた。C戦線はそうしようとしたのかもしれない。同学会のなかでも、自分たちはどういう「ブント」であるのかという話は度々出た。「二次ブントぐらいが結局いいんじゃないの？」とか言う者もいた。けれどそれで「壁」にぶち当たつたから、「軍を——」ということになつたのでは

疎外された人間は、党のなかで疎外からの解放を経験し（「人党は正しく「人間革命」である）、やがて全人類を疎外から解放するであろう。それまでは本質的に、すなわち学生を「目覚めさせる」機会として以外に、大学当局などと争う必要なし。

言うまでもなく、私は「食いつぶす」という表現でもつて、大学に「食い込もう」とした「白樺派」と線を引こうとしていた。「食いつぶす」ことの中身がよく分からないから、全共闘時代の古いスローガン「大学を解放区に！」を持ち出してみたりもしたが、それではT氏が西部講堂でやつてきたこととどう違うのかとまた自問してみたり……。右往左往でしかなくとも、迷いはなかつた。それでよいと思つていた。同学生会は私とともに消えるだろう、と実際に消えるまえから思つていた。白状すれば、一度消えるべきだと感じていた。不遜な言い方をすれば、「一人同学生会」の党派性を歴史的に確定するために、どこにも吸収されず、受け継がれていないと実証するために。まだかろうじて現役活動家であつたころ、なにかの宴席である「としより」——全共闘時代からの党派活動家であつた——が私を知人にこう紹介した。「最後の活動家です」。そのときはまだ無然としたが、すぐに、もうそれを受け容れようと覚悟を決めた。

ないのか。ならば「一次ブント」か？ ではもう一度安保闘争後の論争をやろうというのか？ それならいつそ共産党に戻るか？ もう入れてくれるわけがないだろう……。そんな堂々巡りのような議論をしたことを覚えていて。「大人」たちの総括論争は「子ども」の私から見れば、苦笑して終わるしかない類のものだつた。「ガンジー（非暴力主義）に戻ろう」という言説に触れたときには、怒りすら覚えた。（勝手にやつてろ。「大人」の代表格である「白樺派」にしてやられるにおよび、私は完全に「総括」の試みを見捨てた。断固「子ども」である道を選んだ。「関西ブント」を自覚しながら、私には誰よりも「ブント」を名乗ることへのアレルギーがある。（謙虚に振舞つていても、我々を見下しているのでしょうか？）。

「子ども」への生成が私の「大人」化、成長であつた。「大人」から「子ども」へ、かつ「子ども」から「大人」へ。二つの方向を「私」において交錯させることが「一人同学生会」の党派性であつたろう。「党」とはそんな矛盾の定在／実体化であることにより歴史の流れに抗うものかもしれないと思ひなし、私は自分の「二枚舌」を受け容れた。自分が分裂していることを正当化した。革命は歴史に切断を持ち込むのであるから、というか「切断である」のだから、それを目指す「党」そのものが流れを逆転させる「切断」の定在でなくてどうする、と我が身に言い聞かせ。革共同の

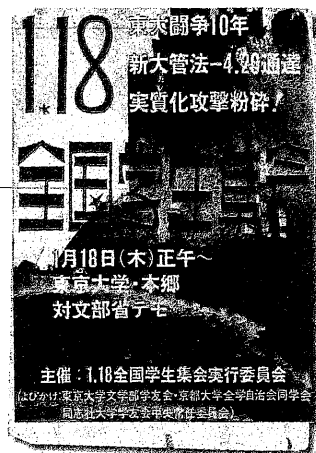
党が「未来社会」の雛型であるなら、私の「党」は革命の、したがって切断の「存在」だ。実在するブントが革命の「武器」道具」なら、私のブントはただの戦術、方便だ。それを受け容れられることだけが、実在の「大人」たちに対する私の優位、「大人」性であった。すでにアルチュセールを読みはじめていた私は、唯物論哲学とは「切断線」そのものなりというテーゼに、私の「大人」性を託した——「子ども」じゃないんだからマルクス主義哲学の援用くらいできるのだよ、先輩。実体のない「線」へと姿を消す。「党」。そんなことを言うから、指導教官から「おまえはKYか」と呆れられたのであった。

「一人同学会」は消えた。ブントは死して名を遺す？ という言い草がもつとも嫌いであった。私の後輩たちとともに消えた中核派が再度キャンパスに登場したとき、「マルと戦った同学会を我々が継承するのだ」といった類のアジ演説を聞き、心中、「篡奪者め」と呟いた。そういうことを言うだろうなと予感していたが、いつそ貶すか無視するかしてほしかった。キャンパスのなかでは、もう忘れてほしかった。

「一人」で消えることはその一人にとって別の悪戦のはじまりにすぎない。T氏はアル中で死に、Y氏は外国に逃げ、多くの「兵士」は市中にまぎれた。私はお勉強に。なかなか静かにほつといてもええ、私はとある社会的事件

の容疑者扱いまでされ、精神を病んだ元活動家にいまで言うストーカーのようなこともされた。忘れてもらうためには、私もまたしばらく外国に逃げるほかなかった。それでも、あちこちで一人になった者に出会うたびに思う。共産主義者はけつして一人ではない。「共産主義者同盟」はまだある。だからみなさん、安心して忘れてください。「追いかけても追いかけても逃げてゆく月のように、二指と指のあいだをすり抜ける、バラ色の日々よ」(ザ・イエローモンキー)。

付記：書き終えた原稿を友人に読んでもらったところ、一九七九年一月の安田講堂前全国集会は、一九日ではなく一八日の開催であった、という指摘を受けた。彼は証拠として、集会のポスターまでPDFにして送ってくれた。当然、文章を訂正しようかと思っただ、思い直してそのまましておくことにした。記憶違いは、



本質的に主観的であるというこのテキストの性格を客観的に証言してくれるだろう。